



「1人1台エコー」の時代に

評者 矢吹 拓 国立病院機構栃木医療センター内科副部長

現代医療において、エコーの果たす役割は年々大きくなっています。「Point-of-Care Ultrasound (POCUS)」などのベッドサイドエコースキルが体系化され、スマホに接続できるような小型軽量化したポケットエコーも開発され、技術革新は日進月歩です。「1人1台エコー」の時代も夢ではなく、医療機関によっては実現しているところもあると聞きます。ベッドサイドで手軽に検査ができ、低侵襲であることも大きな魅力で、これからますます重要性が増していくと思います。

一方で、術者の技量によって検査を通して得られる情報が大きく異なることは課題の1つです。自ら行った検査ではわからなかった所見が、上級医や検査技師によって指摘されることも少なくないでしょう。エコー技術の習熟や標準化が、今後の重要な課題となります。

『レジデントのための腹部エコーの鉄則』は、これからの腹部エコー学習の新たなバイブルとなる1冊です。この書籍の特徴は、何と言っても、経験豊かなスペシャリストによる「鉄則」です。エコー技術のクリニカルパールとも言えるこの鉄則一覧が、本書の冒頭にまとめられています。

「すべての脾嚢胞は脾癌に通じている⇒脾嚢胞は見逃すな」
「肝内胆管は、はっきりと見えたら異常、肝外胆管は seven-eleven rule」
「FAST 陰性＝出血なしではない。FAST は後腹膜臓器・骨盤損傷の出血は評価できない」

腹部エコーを実施するうえで重要なポイントではありますが、何より臨床推論において重要な内容が多く含まれており秀逸です。エコー検査はあくまで臨床推論に基づいて行うべき、という諸先生方の熱い思いが伝わってきます。

本書の構成は、基礎編と実践編に分かれていますが、特に実践編ではQRコードで確認できる「動画」が満載で、その数は実に80本以上です。エコー技術の習得には、書籍を読むだけでは伝わりにくい、具体的なプローブの当て方や声かけなども重要です。動画を通して、まるで指導医が隣にいて教えてくれているような体験学習が可能です。また、実践編2・3では、まず症例の病歴・身体所見による診断推論があり、その推論に基づいたエコー所見とその解釈が解説されています。検査前確率を意識してエコーをどのように用いるか、所見の解釈やその後のアプローチなど、その後の臨床経過をリアルに体験することができそうです。

『レジデントのための腹部エコーの鉄則』は、腹部エコーを学ぶすべての医療従事者にとっての実践的なガイドです。本書を通して、多くの医療者がエコー技術の向上だけでなく、臨床推論においてエコーをどのように用いるかを学ぶことができると確信しています。

レジデントのための
腹部エコーの鉄則

[Web 動画付]

亀田 徹＝編

定価：5,500 円(本体 5,000 円＋税 10%)
B5・152 頁／医学書院／2023
[ISBN978-4-260-05085-2]